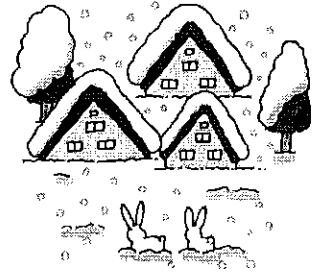


春の矢取りを感じて今日この頃です。春は名々の風は、  
私自身窮地に陥る事なく良い年を過ごせました。

# 窮地を脱する 妙手あり

新島 隆



二月のテーマ

病気の活用

え・たむらかずみ

**人** 生において、大窮地に陥った時の妙手として、倫理運動を創始した丸山敏雄は次のように述べています。

事業の上でも経済の上でも、その他奇禍(きか)にあった場合でも、恐れ、憂え、怒り、急ぎ等々の私情雑念をさっぱりと捨てて、運を天に任せる明朗闊達(めいろうかつたつ)な心境に達した時、必ず危難をのがれることが出来る。

『万人幸福の業』第十二条  
A氏が大病を患ったのは、四十歳を過ぎた頃でした。

最初は、階段の昇り降りや坂道を歩く際に呼吸が苦しくなるのを感じました。しばらく放置していたものの、念のため病院で診てもらうと、即入院となったのです。

病名は「肺動脈血栓塞栓症」。エコーミ―症候群の一種で、両肺の血管に血栓が詰まり、肺の血圧が高まって、呼吸が苦しくなっているということでした。

病院で二週間治療を続けましたが、症状は改善されません。その後さらに検査をすると、特定疾患

にあたる難病であることが判明し、三カ月後、手術することが決まりました。医師からは「症状を改善することと、寿命を伸ばすために手術をします。リスクは高いので、百パーセント成功するとは限りません」と説明を受けました。

毎日のように検査が続く中、A氏は不安に苛まれ、病院のベッドで自問自答する日々です。

ある時、担当の医師から「時間があれば歩くといよいよ」というアドバイスを受け、少しでも不安が紛れるならと、点滴を付けたまま歩き続けました。

手術を受ける三日前、院内を歩いていると、ふと息子の言葉を思い出したのです。

それは、最初に入院した際、「なぜこの病気になったのだろう」と妻に弱音を吐いた時、「父さんが、母さんの言うことを聞かなかったからだよ」と言った言葉でした。

夫を心配し、「早く病院へ行つて」という妻の言葉を、息子はしっかりと聞いていたのです。

たのですが、思い返せばA氏は、妻や息子の言葉を真摯に受け止めてこなかっただけでなく、周囲の声に耳を傾けていなかった自分に気づかされたのです。

〈元気な頃は「自分が、自分が」という思いが強すぎて、一人ではどうにもできないことまで抱え込んでいた。そのくせ失敗すると落ち込んでしまい、切り替えができなかった〉と自らを省みたA氏。

〈自分の力ではどうすることもできないのだから、先生にすべて任せしよう〉と、心が軽くなるような感覚を覚えました。

そして、〈必ず手術は成功する。新しい自分に生まれ変わるんだ!〉という希望が胸の奥底から湧いてきたのです。

約十一時間に及んだ大手術は、無事成功しました。退院後の経過も順調で、やがて仕事復帰を果たすことができたのです。

大病を通じて、自分がいかに多くの人に支えられているかを実感したA氏は今、相手の話をしっかりと受け止めて過ごしています。